

【書評】



 書評

大山正 著

視覚心理学への招待

見えの世界へのアプローチ

サイエンス社

ISBN4-7819-0963-9 C3311

2000年11月発行

評者：株式会社東芝 亀山研一

新心理学ライブラリ 18 梅本雅夫・大山 正 監修

視覚心理学への招待

見えの世界への
アプローチ

大山 正 著



サイエンス社

我々は、空間の広がりや明るさ、物の形、動きや色など、様々な情報を目で捕らえ理解している。ごく当たり前の話と言えればそれまでだが、本書は、こうした「見えの世界」に潜む視覚の法則を様々な角度から捕らえ、わかりやすく纏めたものである。9個の章より構成され、各トピックスはほぼ独立している。但し、第1章は序論的な性格を持つため、先に読むのが望ましい。他は読む順番を変えても、特に問題は無い。

また、より進んだ話や詳しい実験手法等はBox記事として纏められており、様々な読者のレベルや興味に合わせた配慮がなされている。以下、1章から順に内容を概説する。

1章では、まず、視覚の話とは別に、知覚とは何かを感覚遮断の実験から説明している。我々には、何かを知覚したいという普遍的な欲求があり、何の感覚も得られない状況には耐えられない。人の心の奥深さを改めて感じさせる話である。続いて、目の構造と機能の話、知覚研究の学問的系譜、視覚心理実験法について述べている。特に視力と視感度についての話は興味深い。暗闇で視力が落ちる理由がわかる。

2章では、色と明るさについて述べている。よく知られているマンセルの色立体や色覚説の他、寒暖色や膨張

色等、色の持つ心理効果についても触れられている。

3章は、一つの絵についてどちらが図でどちらが地として知覚されるかについて述べている。図になりやすさの条件は、標識やポスターのデザインに活かされている。

4章は形の知覚に関する話であり、有名な主観的輪郭、透明視、心的回転などについて触れている。特に鏡映文字と心的回転の話は面白い。幼児は鏡映文字を書くことが多いが、その理由が実験によって明らかにされている。また、2章の色の心理効果と同様に形の感情効果についても述べている。造形芸術に役立ちそうである。

5章は、複数の図が同時に纏まって見える群化と呼ばれる現象について説明している。星座などは、正にこの群化によって生まれたものと言えるが、漢字かな混じり文の読みやすさ、スペースや句読点の挿入と文章の見やすさ(見にくさ)など、身近な問題とも関連する。

6章は、幾何学的錯視に関する話であり、様々な錯視図形の紹介とその要因(説)について述べている。また、空間知覚との関係についても触れられている。

7章では、VRや三次元ディスプレイ関係者にはお馴染みの立体知覚要因について述べている。

8章も、VR関係者には馴染み深い運動知覚について書かれている。誘導運動や滝をじっと見た後で起こる運

動残効、仮現運動などである。運動が与える印象についても実験に基づいて述べられており、キャラクターの動きづけをする場合のベースとなりそうである。

最後の9章では、再び、視覚というより認知と知覚の関係について論じられている。

全体を通して、実験結果をベースに視覚の様々な特性が量的に比較されているため、大変わかりやすく、かつ

説得力がある。特に、日常的に実感できる視知覚現象を例に解きほぐしているテーマが多いため、評者のように心理を専門としていない読者にも面白い内容となっている。参考文献が充実しているため、さらに勉強を深めることも可能である。VRをはじめ、ヒューマンインタフェース、Webデザイン等に関わる研究者、デザイナーに、一読をお勧めしたい。